

## PP-02

Gendlin の理論を基盤とした人間性心理学的認知モデルの検討  
—基礎心理学と人間性心理学の交差Ⅲ—企画者：宮田 周平<sup>1)</sup>話題提供者：久羽 康<sup>2)</sup>指定討論者：上田 紋佳<sup>3)</sup>、藤木 大介<sup>4)</sup>、榎本 光邦<sup>5)</sup>

1) 鎌倉女子大学 児童学部 子ども心理学科、2) 神奈川大学 心理相談センター、  
3) 福山平成大学 福祉健康学部 こども学科、4) 広島大学 大学院教育学研究科 学習開発学講座、  
5) 群馬パース大学 教養共通教育部

keyword：相互作用、認知モデル、交差

【はじめに】今年度から大学・大学院で公認心理師の養成課程が始まり、特に大学の養成課程においては臨床系の科目だけでなく基礎系の科目が必修となり、基礎系と臨床系の心理学の繋がりが一段と求められている。企画者らは、人間性心理学的なセラピーを認知過程の視点から捉えなおすこと(宮田ら, 2016)、動機づけの視点から捉えなおすこと(宮田ら, 2017)により、基礎心理学と人間性心理学の交差を試みてきた。それにより、人間性心理学的なセラピーをワーキングメモリやメタ認知、動機づけといった基礎心理学の理論や研究によってある程度説明できることがわかった。一方で、セラピーにおける相互作用については基礎心理学の理論による説明が難しいこともわかった。また、これまでは人間性心理学から基礎心理学への提案はあまり行うことができていない。そこで、本企画ではGendlinの相互作用の理論を基盤とした人間性心理学的認知モデルを提起して、それに対して基礎心理学の立場からコメントを行う。コメントは認知・教育心理学の立場(上田紋佳)、言語・思考心理学の立場(藤木大介)、基礎と臨床の両面に係る立場(榎本光邦)からである。なお、本企画は3回目ではあるが、初参加の方も含めてフロアを交えた議論を行っていきたいと考えている。

## 【人間性心理学的認知モデル:Gendlinの「interaction first」を自他分化のプロセスとして理解する】

話題提供者は、主に E. T. Gendlin による相互作用としての有機体の理論を参照し、人間の認知の有機体的モデルを提示する。

有機体(あるいは人間、人間の心)を理解する上で

はさまざまな視点がありうるが、その一つは有機体を一つの完結した構造ないしメカニズムとして記述し、その構造がどのように機能するか、またどのように外界と相互作用するかを記述する視点である。この視点はわかりやすいが、有機体の重要な特徴である、自分自身をダイナミックに生成しつづけるという側面を見落としがちである。実際には有機体は環境に反応することを通じて、環境と自らとの間に境界を生成・維持し、自分自身を生み出しつづけている。話題提供者はGendlinの「まず相互作用がある(interaction first)」という提言を、この有機体の自己生成という視点から理解し、その上で人間の認知を(認知メカニズムが外界からの情報を取り入れることとしてではなく)環境に心理的・象徴的な水準で反応することを通じて人間が(認知される意味としての)対象と(認知する主体としての)「私」自身とを対置させるプロセスとして理解するモデルを提示する。